第３２３回　令和８年１１月５日（木）

「すばらしい新世界」

堤未果さんの「すばらしい新世界」は新書で 30 分もあれば読了してしまう分量ですが、内容は何日も考えさせられるものでした。

地球上の富が１％の富裕層に集中している現代において、人間の寿命だけが平等だと思っていましたが、すでにお金で寿命が買える時代になっているということがわかりました。
限界こそありますが、細胞の培養で新しい臓器と取り換えることはすでに可能です。そうは言っても脳がだめになれば終わりと考えていましたが、それさえもテクノロジーで超越することができるようになりつつあります。

一方９９％の庶民にそこまでの恩恵はありません。欧米では安楽死法が認められ、対象者の解釈が拡大しています。もし経済的困難による安楽死が認められてしまえば、日本のような高齢化社会で社会保障費の負担増大による高齢者の切り捨てにつながらないか不安です。

格差社会が開き直ったかのように弱者に厳しい側面を露わにし始めています。温暖化で人類が地球に住めなくなった時、本気で他の惑星に移住する計画を立てている富裕層もいます。移住で生き残るのは優秀な人材のみにする優生学的な思想も見え隠れします。

あらゆるところに格差が存在しても、寿命や老いは誰にも平等に訪れることが人類の救いになっていると考えることもできます。ところがいまや経済格差は生命までもコントロールできるところまできてしまいました。

歴史上、富の集中は革命によって崩されてきました。しかし現在のシステムでは貧富の逆転はおこりそうにありません。リーダーが変わるくらいでは地球規模の格差問題は解決しないと思います。

人間のクローンをつくる技術も倫理的なストップがかからなければすぐにでも実現可能です。むしろ街中で実際に歩いている可能性もあります。刹那的な行動をおこす人間が出ないか、大変心配です。

永遠に生きられたり、何度も人生をやり直すことができたりすることは充実した人生から遠さかる行為だと思います。たった一度の人生であり、時間は戻らないからこそ毎日が大切になると思います。

どこかでストップをかけなくてはいけないことだと思います。